

## 研究ノート (Study Notes)

# 心理的距離による検索容易性効果の調整過程の検討

織田 涼

(立命館大学大学院文学研究科)

Moderating Processes of Psychological Distance for Ease of Retrieval Effects.

ORITA Ryo

(Graduate School of Letters, Ritsumeikan University)

Although people rely on ease of retrieval experiences to make judgments, two types of psychological distance variables, temporal distance and familiarity, moderate this reliance. This study investigated these moderating processes, and compared the functional capability of two moderator variables. Temporal distance moderated the direct process of ease of retrieval effect. Participants predicted their acquaintance's future behavior based on the experiences only when they retrieved the near past information. On the other hand, familiarity with the target acquaintance moderated the indirect process of ease of retrieval effect. When participants experienced difficulty in retrieving familiar acquaintance's information, their prediction was contrary to the retrieved contents. And, this effect was mediated by the spontaneous recall of unrequested information. Additionally, familiarity's influences were observed both when high and low familiarity conditions were constructed based on participants' estimation value (Experiment 1), and when the two conditions were manipulated with experimental instructions (Experiment 2). These results indicated that moderating pattern of psychological distances was coherent, but the mechanisms of each moderator's influence were inherent. In discussion, the inherent mechanisms were explained in terms of expectancy about task difficulty, processing capacity, and construal level of retrieved information.

**Key Words** : metacognitive experience, unrequested cognition, familiarity, temporal distance, social judgment

キーワード：キーワード：メタ認知的経験, 求められない認知, 親近性, 時間的距離, 社会的判断

友人が親切に行動した出来事を簡単に思い出せば、その友人はこれからも親切であり続けると予測できる。逆に、なかなか思い出せなければ、そのような行動を将来に期待しないだろう。われわれは出来事の想起にともなう容易さ—困難さの経験に基づいて判断することがあり、これを検索容易性効果 (ease of retrieval effect)

と呼ぶ。この現象は、自己の特性や態度の評価、他者の特性評価や行動予測、社会集団の印象、商品の購買意欲、病気の罹患の見込みなど、多種多様な判断で観察される (Schwarz, 1998)。

Schwarz, Bless, Strack, Klumpp, Rittenauer-Schatka, & Simons (1991) の実験では、積極的な行動事例を12個想起し、強い困難さを経験し

た参加者が、6個だけを容易に想起した参加者よりも、自己の積極性を低く評価した。この現象は利用可能性ヒューリスティック (Tversky & Kahneman, 1973) として説明できる。われわれは「検索が容易な事例は多くあり、困難な事例は少ない」というメタ認知的知識をもつ。想起に困難を経験すると、この知識を参照して事例の頻度が少ないと推定できる (Schwarz, 1998)。その結果、判断は事例の意味に反するよう逆説的に変化する。困難な経験の強さと判断との負の相関関係として表現できるこの現象を、本研究では検索容易性の直接効果と呼ぶ。

また近年の研究では、判断を肯定する事例の想起が困難であると、想起を求められていない否定的な意味の事例を自発的に想起し、判断に考慮する過程が報告されている。Tormala, Falces, Briñol, & Petty (2007) は、自己の積極的な行動事例を10行動または2行動だけ再生した後に、積極性を評価する課題を実施した。また、この評価を否定する消極的な事例をどれだけ自発的に想起したのかを、事後に報告させている。その結果、10行動を再生した参加者は、2行動を再生した参加者よりも、自己を積極的ではないと評価し、また否定事例を多く想起したと報告した。回帰分析では、肯定事例の再生数が否定事例の自発的想起を説明し、この自発的想起が判断を説明する媒介関係が確認された。この媒介関係を検索容易性の間接効果と呼ぶ。Tormala et al. (2007 前出) は、間接効果をシステムティックな処理と特徴付けており、直接効果とは独立の過程ととらえている。

検索容易性効果を調整する変数は、数多く報告されている (Greifeneder, Bless, & Pham, 2011)。なかでも、心理的距離 (psychological distance) と呼ばれる調整変数の影響が頑健に観察される。心理的距離とは、判断対象や処理情報に対して感じられる主観的な距離であり、具体的には親近性、現実性、時間または空間の距離が挙げら

れる (Trope, Liberman, & Wakslak, 2007)。このうち、親近性および時間的距離の影響が検討されており、心理的距離が近い時に検索容易性が生じるという結果が一貫して確認されている。しかし、その背後に想定されるメカニズムが、親近性と時間的距離とは異なる。

親近性の影響を検討した Rothman & Hardin (1997) は、親しい友人の性格特性の評価で検索容易性効果が生じるが、親しくない知人の評価では生じないという実験結果を示している。親密さや好意の感覚によって特徴づけられる他者との関係では、強い感情的反応を引き起こしやすい。このような親しい人物の判断では、主観的な感覚を参照することが習慣化している。そのため、親近性の高い他者の判断では、主観的経験が利用されやすく、事例の内容を参照しないと考えられている。

時間的距離の影響を検討した研究としては、Raghubir & Menon (2005) の実験がある。この実験では、最近の出来事を想起すると、同様の出来事の生起頻度の推定に、困難さの経験が影響した。しかし、半年以上前の出来事を想起した場合には、困難さの影響が観察されなかった。半年以上前という遠い過去の出来事の想起は、困難であることが事前に期待できる。多くの事例の想起が困難であっても、この経験は期待に一致する「予想どおり」の困難さであり、情報としての価値を失う (Hansen & Wänke, 2008)。時間的距離の増加は、事前に期待される困難さの水準を高めることで、実際の経験の影響を調整すると考えられている。

親近性と時間的距離の影響は異なる認知課題で検討されてきたため、その働きの同異を評価できない。また、その影響のメカニズムが、検索容易性効果が生じる二つのプロセスに対応づけられていないことも、働きの同異を不鮮明にしている原因と考えられる。すなわち、検索容易性の直接効果と間接効果のいずれにおいて、

親近性および時間的距離が調整変数として機能するのかという問題である。本研究ではこの問題を取り上げ、親近性と時間的距離の働きの同異を、検索容易性効果の調整のプロセスに見られる共通点から検討する。

認知課題には他者の行動予測を用いた（織田・八木, 2010）<sup>1)</sup>。参加者は、判断対象に挙げた人物の過去の誠実な行動事例を想起した後で、当該人物が将来において誠実に行動する見込みを予測した。また、想起時に経験した困難さの評定を求めた。この評定と行動予測との負の相関関係を、検索容易性の直接効果とみなせる。加えて、想起を求められていない不誠実な事例の想起頻度を、後で報告させた。ただし、参加者には否定語である「不誠実」ではなく「いいかげん」の語を用いて教示した。将来の誠実な行動の予測を、過去の誠実な行動事例は肯定し、不誠実な事例は否定する。したがって、誠実な肯定事例の想起中に不誠実な否定事例が自発的に想起され、予測に反映されるプロセスを、検索容易性の間接効果とみなせる。

心理的距離の操作として、実験1では想起事例の時間的距離だけを系統的に変化させた。親近性は実験計画において操作せず、事後に分類した。参加者は任意の知人を対象人物に挙げ、その人物との親しさを評定した。この親しさの評定値に基づいて親近性の高群と低群に分けた。

実験2では、親近性の操作方法を変え、実験計画において系統的に変化させた。これにより、結果の再現性を確認し、加えて操作方法の違いの影響を検討した。

## 実験 1

### 方法

**参加者** 84名（男性25名、女性59名、平均年齢22.7歳、SD=4.4）の大学生および専門学校生が参加した。大学生は小教室で4名から6名ずつ参加し、専門学校生は授業教室で一斉に参加した。このうち4名は質問への回答に欠損があったため、分析の対象から外した。

**実験計画** 時間的距離（2：近、遠）×想起事例数（2：1事例、4事例）の参加者間計画で実験を実施した。この計4条件に、分析対象の80名を20名ずつ無作為に割り当てた。

**手続き** 参加者に冊子を渡し、そこに記載されている質問に回答するよう求めた。

最初に参加者は、判断の対象となる人物を一人挙げた。織田・八木（2010）は、性格特性が明確に認知される他者の判断で、検索容易性効果が生じやすいことを示している。この知見に従い、本実験では“誠実だと思われる知人を一人挙げる”よう指定した。参加者は、人物との親しさおよび知り合ってから期間を回答した。親しさは、“全くそう思わない（1）”から“強くそう思う（10）”までの10段階で評定した。

次に参加者は、過去に観察した行動のうち、当該人物の誠実さを表す事例を想起し、調査用紙に記入した。この時、時間的距離の操作として、近条件の参加者の半数には“最近一ヶ月以内の行動”を、遠条件の参加者には“半年以上前の行動”を想起するよう求めた。これに直交して想起事例数を操作し、参加者の半数には1事例、残り半数には4事例の想起を求めた。

想起課題の後、参加者は行動の予測、事例検索の困難さ、および不誠実な事例の自発的な想起頻度について評定した。行動予測では、計12行動の一つずつについて、対象人物が取る見込みを、“全く見込みがない”（1）から“見込みがとても高い”（10）までの10段階で評定した。

1) Rothman & Hardin (1997) は他者判断の課題に特性評価を用いたが、Caruso (2008) の研究では同じ認知課題で検索容易性効果が生じないという結果を示しており、特性評価では安定した結果が見込めないと考えられた。

このうち誠実な3行動(“人と交わした約束は必ず守る”, “任せられた仕事は最後までやり遂げる”, “話し相手が変わっても意見や態度が一貫している”)の評定を行動予測の測度とした。残りの9行動は, 誠実さと関連がない行動で構成した(“お化け屋敷に行けば泣く”など)<sup>2)</sup>。

困難さについては, 「誠実な行動を思い出すのに苦労したか」, 「誠実な行動はすぐに思い出せたか」, 「誠実な行動を思い出すのは難しいと感じたか」の3項目の当てはまりの程度を10段階で評定した。

不誠実な事例の想起頻度については, 誠実な行動の想起中に「いいかげん」な行動を思い出した頻度を, 「まったくなかった」(1)から「よくあった」(10)までの10段階で評定した。この評定の後, 実験の目的を参加者に説明し, 参加について謝意を伝え, 実験を終了した。

## 結果

**親近性** 対象人物との親しさの評定は中央値が8となった。これより高く評定した参加者を親近性の高条件( $n=38, M=9.6$ ), 中央値以下の評定の参加者を低条件( $n=42, M=6.8$ )とした。

実験計画の2要因に親近性の高低を加えた3要因参加者間計画で, 親しさの評定を従属変数に分散分析を実施したところ, 親近性要因の主効果のみが有意だった( $F(1, 72)=111.1, p<.001, \text{partial } \eta^2=.61$ )。また, 知り合ってから期間を同じ要因計画で分析すると, 親近性要因の主効果のみが有意だった( $F(1, 72)=7.0, p=.01, \text{partial } \eta^2=.09$ )。高条件の参加者( $M=118.8$ ヶ月)は, 低条件の参加者( $M=69.2$ ヶ月)よりも, 付き合いが長く親しい人物を判断の対象に挙げた。

**困難さの経験** 事例数要因の操作確認として, 困難さの評定を対象に3要因分散分析を実施し

た。困難さの測度には, 3項目の平均得点を用いた( $\alpha=.92$ )。分析の結果, 事例数の主効果が有意だった( $F(1, 72)=9.2, p=.003, \text{partial } \eta^2=.11$ )。参加者は1事例条件( $M=4.8$ )より4事例条件( $M=6.8$ )で想起に強い困難を経験した。

**行動予測** 誠実な3行動の見込み評定から平均得点を計算し, 予測の測度とした( $\alpha=.81$ )。3要因の分散分析では, 時間的距離の主効果( $F(1, 72)=4.1, p=.05, \text{partial } \eta^2=.05$ )と事例数の主効果( $F(1, 72)=6.8, p=.01, \text{partial } \eta^2=.09$ )が有意だった。

また, 親近性と事例数の交互作用が有意だった( $F(1, 72)=4.3, p=.05, \text{partial } \eta^2=.06$ )。この2要因で構成される4群の平均値をFigure 1に示した。事例数の単純主効果は親近性の高条件でのみ有意であり( $F(1, 72)=10.4, p=.002, \text{partial } \eta^2=.13$ ), 低条件では有意ではなかった( $F(1, 72)=0.2, p=.70, \text{partial } \eta^2<.01$ )。高条件の参加者は, 1事例よりも4事例を想起した時に, 将来の誠実な行動の見込みを低く予測した。親近性の単純主効果は, 事例数の両水準で有意ではなかった。

加えて, 時間的距離と事例数の交互作用が有意だった( $F(1, 72)=10.1, p=.002, \text{partial } \eta^2=.12$ )。この2要因で構成される4群の平均値をFigure 2に示した。事例数の単純主効果は時間的距離の近条件で有意だが( $F(1, 72)=16.7, p<.001, \text{partial } \eta^2=.19$ ), 遠条件では有意ではなかった( $F(1, 72)=0.2, p=.69, \text{partial } \eta^2<.01$ )。近条件の参加者は, 1事例よりも4事例を想起した時に, 将来の誠実な行動の見込みを低く予測した。時間的距離の単純主効果は, 4事例条件でのみ有意だった( $F(1, 72)=13.4, p<.001, \text{partial } \eta^2=.16$ )。

他の主効果および交互作用は有意ではなかった( $F_s<1.0$ )。すなわち, 親近性と時間的距離は互いに独立に行動予測に影響した。

**求められない事例の想起** 不誠実な事例の自発的な想起頻度を対象に, 3要因の分散分析を実施した。親近性と事例数の交互作用のみが有

2) 行動予測に用いた12行動は, 織田・谷口・木原・八木(2011)が予備実験の結果に基づいて作成したものである。

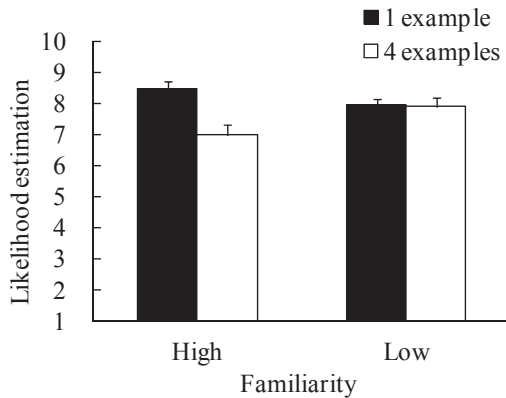


Figure 1. Mean scores of likelihood estimation for honest behaviors as a function of familiarity with target others and the number of recalled examples (Experiment 1). Error bars represent SE.

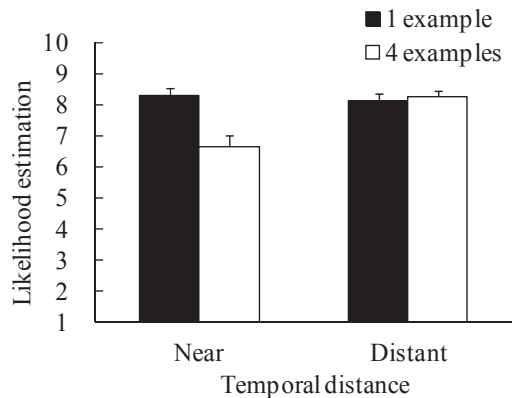


Figure 2. Mean scores of likelihood estimation for honest behaviors as a function of temporal distance and the number of recalled examples (Experiment 1). Error bars represent SE.

意であり ( $F(1, 72) = 4.0, p = .05, \text{partial } \eta^2 = .05$ ), この2要因で構成される4群の平均値を Figure 3に示した。事例数の単純主効果は親近性の高条件でのみ有意だった ( $F(1, 72) = 4.4, p = .04, \text{partial } \eta^2 = .06$ )。親しい人物の誠実な事例を想起した参加者は、1事例よりも4事例を想起した時に、不誠実な事例も自発的によく想起した。親近性の単純主効果は、1事例条件でのみ有意だった ( $F(1, 72) = 5.5, p = .02, \text{partial } \eta^2 = .07$ )。

**調整過程の検討** 困難さの経験および不誠実な事例の想起が行動予測に及ぼす影響を、重回帰分析を用いて検討した。すなわち、行動予測(P)を従属変数とする重回帰式に、困難さ(D)と求められていない不誠実な事例の自発的想起(UR)を説明変数として投入した。

分散分析では、また、親近性(F)と時間的距離(TD)が独立に、事例数要因との交互作用を示した。そこでこの二つの変数が検索容易性効果を調整すると想定し、困難さの経験との交互作用項( $F \times D$ および $TD \times D$ )をそれぞれ作成し、説明変数に加えた<sup>3)</sup>。

3) 重回帰式の構成に先立ち、交互作用項の多重共線性を抑えるために、説明変数に中心化を施した(Aiken & West, 1991)。

$$P = D + UR + F + D \times F + UR \times F \quad (\text{式1})$$

式1は、困難さの経験および不誠実な事例の想起頻度の影響と、これらの影響を親近性が調整すると想定した交互作用項とで説明変数を構成した。またCohen(1978)に倣い、親近性の単独効果の項も式に加えた。分析の結果、不誠実な事例の想起(UR,  $\beta = -.25, p = .03$ )だけが行動予測を有意に説明した。交互作用項の係数は有意ではなかった。

$$P = D + UR + TD + D \times TD + UR \times TD \quad (\text{式2})$$

式2は、困難さの経験および不誠実な事例の想起頻度の影響と、これらの影響を時間的距離が調整する交互作用項とを説明変数にして構成した。また式1と同様に、時間的距離の単独効果の項も式に加えた。時間的距離を投入する際には、近条件を1、遠条件を2とするダミー変数を用いた。行動予測を有意に説明したのは、不誠実な事例の想起(UR,  $\beta = -.21, p = .05$ )、時間的距離(TD,  $\beta = .24, p = .03$ )、および困難さと時間的距離の交互作用項( $D \times TD, \beta = .24, p = .03$ )であった。

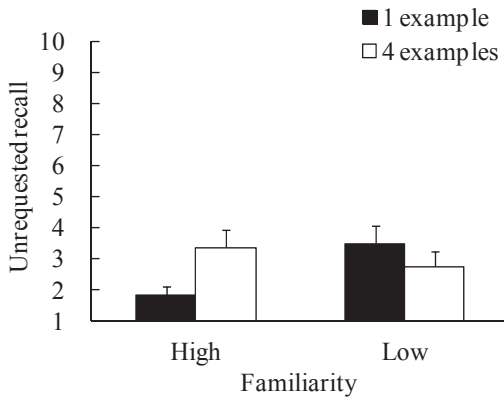


Figure 3. Mean frequency of unrequested recall as a function of familiarity with target others and the number of recalled examples (Experiment 1). Error bars represent SE.

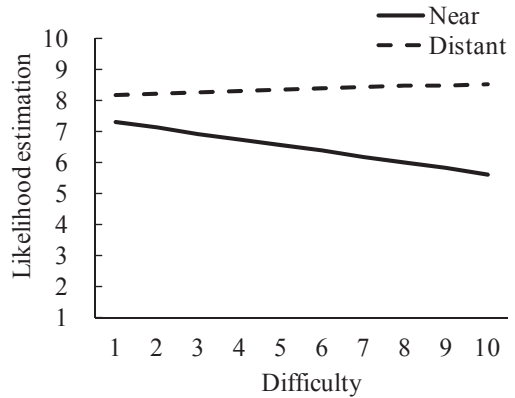


Figure 4. Simple slopes of regression line as a function of difficulty experience in near and distant conditions (Experiment 1).

交互作用項の下位検定として、困難さの単純傾斜を時間的距離の条件別に算出し、Figure 4に示した。時間的距離の近い事例を想起した場合、困難さは行動予測を有意に説明した( $\beta = -.41, p = .02$ )。時間的距離が遠い場合、困難さの影響は有意ではなかった( $\beta = .08, p = .53$ )。すなわち、時間的距離は困難さの影響を調整し、最近の事例の想起が困難であるほど誠実な行動の見込みが低く予測された。

### 考察

実験1では、親近性と時間的距離が検索容易性効果を調整するという先行研究の結果を追認し、その調整の過程の違いを明らかにした。ここでは両変数の調整の過程を個別に整理する。

親近性の影響を見ると、行動予測の分散分析、および不誠実な事例の想起頻度の分散分析で、事例数要因との交互作用を示した。すなわち、親しい人物の肯定事例を多く想起した参加者だけが、否定事例を自発的に多く想起し、行動予測を肯定事例の意味に反するよう変化させた。他方で、重回帰分析では親近性の効果が観察されなかった。親近性は否定事例の想起に作用し、検索容易性の間接効果を調整する変数と位置づ

けられる。

次に時間的距離の影響を見ると、行動予測の分散分析で事例数要因との交互作用を示した。すなわち、最近の肯定事例を多く想起した参加者だけが、肯定事例の意味に反する行動予測を示した。不誠実な事例の想起頻度への影響は観察されなかった。重回帰分析では、時間的距離が困難さの影響との交互作用を示した。最近の肯定事例の想起に伴った困難さは行動予測に影響したが、遠い過去の事例の想起に伴った困難さは影響しなかった。時間的距離は困難さが判断に及ぼす影響に作用し、検索容易性の直接効果を調整する変数と位置づけられる。

ただし、親近性と時間的距離の働きが異なる理由は、心理的距離の種類の違いではなく、操作方法の違いに帰属できる可能性がある。事例の時間的距離は想起課題時に実験者から指示した。参加者はこの指示を課題要求として認知し、そこから想起の難易度に期待を形成したのかもしれない。一方、親近性は評定値に基づいて事後に分類した。この手続きでは、参加者が親しさの違いから課題要求を認知したとは考えられない。したがって、教示に基づく課題要求の認知の有無が、検索容易性の調整変数としての働

きを変化させる可能性がある。実験2ではこの可能性を検討した。

## 実験2

実験2は、教示に基づく課題欲求の認知の有無が、検索容易性効果の調整の種類を規定するという代替仮説の検討を目的とした。そのために、実験1では事後評定に基づいて事後に分類した親近性を、実験2では教示を用いて操作した。この変更のもとで、実験1では間接効果を調整した親近性が、直接効果を調整する可能性を検討した。

## 方法

**参加者** 48名（男性31名、女性17名、平均年齢20.5歳、SD=2.9）の大学生および専門学校生が参加した。大学生は小教室で4名から6名ずつ参加し、専門学校生は授業教室で一斉に参加した。

**実験計画** 親近性（2：高、低）×想起事例数（2：1事例、4事例）の参加者間計画で実験を実施した。この計4条件に、参加者を12名ずつ無作為に割り当てた。

**手続き** 実施手順は、親近性の操作方法を除いて、実験1と同じであった。判断の対象人物を一人挙げる際に、親近性の高条件に割り当てられた参加者には“よく知っている親しい友人”を、低条件の参加者には“それほど親しくない知人”を対象に、その中から誠実だと思われる人物を挙げるよう指示した。その後実施した親しさの評定および知り合ってから期間の回答は、親近性要因の操作確認に用いた。

## 結果

**親近性** 親近性要因の操作確認を行った。実験計画の2要因を用いて、親しさの評定値の分散分析を実施したところ、親近性要因の主効果

のみが有意だった ( $F(1, 44)=8.0, p=.01, \text{partial } \eta^2=.15$ ) 高条件の参加者 ( $M=8.0$ ) は低条件の参加者 ( $M=6.5$ ) よりも人物を親しいと評価した。

また、知り合ってから期間を同じ要因計画で分析すると、親近性要因の主効果のみが有意だった ( $F(1, 44)=23.8, p<.001, \text{partial } \eta^2=.35$ )。高条件の参加者 ( $M=102.7$ ヶ月) は、低条件の参加者 ( $M=10.3$ ヶ月) よりも、付き合いが長い人物を判断の対象に挙げた。

**困難さの経験** 事例数要因の操作確認として、困難さの評定を対象に3要因分散分析を実施した。困難さの測度には、3項目の平均得点を用いた ( $\alpha=.87$ )。分析の結果、事例数の主効果のみ有意だった ( $F(1, 44)=5.8, p=.02, \text{partial } \eta^2=.12$ )。参加者は1事例条件 ( $M=4.6$ ) より4事例条件 ( $M=6.3$ ) で想起に強い困難を経験した。

**行動予測** 誠実な3行動の見込み評定から平均得点を計算し、行動予測の測度とした ( $\alpha=.72$ , Figure 5)。2要因の分散分析では、交互作用が有意傾向にとどまった ( $F(1, 44)=3.7, p=.06, \text{partial } \eta^2=.08$ )。有意ではなかったものの、実験1の結果との一貫性を検討するために、事例数の単純主効果を分析した。その結果、親近性の高条件でのみ有意だった ( $F(1, 44)=4.1, p=.05, \text{partial } \eta^2=.09$ )。親しい人物の誠実な事例を想起した参加者は、1事例よりも4事例を想起した時に、将来の誠実な行動の見込みを低く予測した。親近性の単純主効果は、1事例条件で有意傾向だった ( $F(1, 44)=3.2, p=.08, \text{partial } \eta^2=.07$ )。

**求められない事例の想起** 不誠実な事例の想起頻度を対象に、2要因の分散分析を実施した (Figure 6)。親近性の主効果が有意だった ( $F(1, 44)=10.1, p=.002, \text{partial } \eta^2=.19$ )。交互作用は有意ではなかった ( $F(1, 44)=2.1, p=.16, \text{partial } \eta^2=.05$ )。こちらも有意ではなかったものの、実験1の結果との一貫性を検討するために、事例数の単純主効果を分析した。その結果、親近性の高条件でのみ有意だった ( $F(1, 44)=4.6, p=.04$ ,

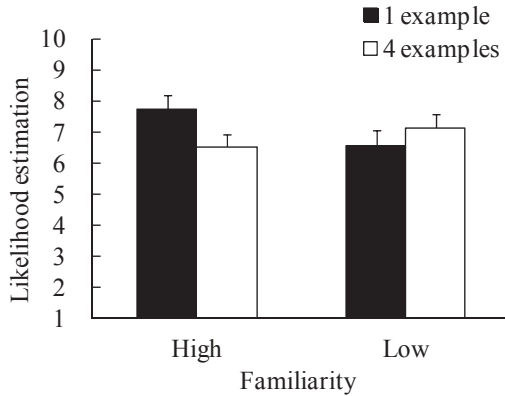


Figure 5. Mean scores of likelihood estimation for honest behaviors as a function of temporal distance and the number of recalled examples (Experiment 2). Error bars represent SE.

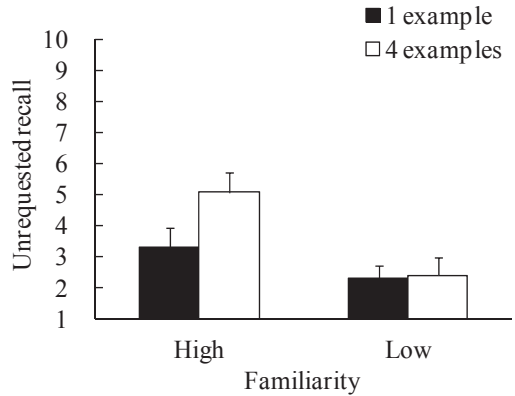


Figure 6. Mean frequency of unrequested recall as a function of familiarity with target others and the number of recalled examples (Experiment 2). Error bars represent SE.

$partial \eta^2 = .09$ )。親しい人物の誠実な事例を想起した参加者は、1事例よりも4事例を想起した時に、不誠実な事例も自発的によく想起した。親近性の単純主効果は、事例数の4事例条件でのみ有意だった ( $F(1, 144) = 10.7, p = .002, partial \eta^2 = .20$ )。

**結果の一貫性** 行動予測および不誠実な事例の想起頻度の分散分析では、親近性と事例数の交互作用が有意ではなく、実験1の結果が完全には再現されなかった。そこで、二つの実験結果の一貫性を再度検討するために、データを統合した分析を実施した。すなわち、実験サンプルを要因とみなし、親近性 (2: 高, 低) × 想起事例数 (2: 1事例, 4事例) × サンプル (2: 実験1, 実験2) の3要因参加者間計画で、行動予測および不誠実な事例の想起の分散分析を行った。ここで、親近性と事例数の交互作用が有意であり、この効果にサンプルの違いの影響 (すなわち3要因の交互作用) が観察されなければ、二つの実験結果が一貫していたと言える。

行動予測では、事例数の主効果 ( $F(1, 120) = 4.4, p = .04, partial \eta^2 = .04$ )、および親近性と事例数の交互作用 ( $F(1, 120) = 9.8, p = .002, partial \eta^2 = .08$ ) が有意だった。事例数の単純主効果は親

近性の高条件でのみ有意だった ( $F(1, 120) = 13.4, p < .001, partial \eta^2 = .10$ )。また、親近性の単純主効果は、1事例条件 ( $F(1, 120) = 5.5, p = .02, partial \eta^2 = .04$ ) および4事例条件 ( $F(1, 120) = 4.3, p = .04, partial \eta^2 = .03$ ) で有意だった。3要因の交互作用は有意ではなかった ( $F(1, 120) = 0.1, p = .74, partial \eta^2 < .001$ )。

不誠実な事例の想起頻度では、親近性と事例数の交互作用が有意だった ( $F(1, 120) = 6.0, p = .02, partial \eta^2 = .13$ )。事例数の単純主効果は親近性の高条件でのみ有意だった ( $F(1, 120) = 8.3, p = .004, partial \eta^2 = .06$ )。また、親近性の単純主効果は、4事例条件でのみ有意だった ( $F(1, 120) = 8.4, p = .005, partial \eta^2 = .07$ )。3要因の交互作用は有意ではなかった ( $F(1, 120) = 0.1, p = .72, partial \eta^2 = .001$ )。

**調整過程の検討** 困難さの経験および不誠実な事例の想起の影響と、親近性によるこれらの影響の調整を、実験1で構成した式1の重回帰分析で検討した。不誠実な事例の想起 (UR,  $\beta = -.39, p = .04$ ) だけが行動予測を有意に説明した。交互作用項の係数は有意ではなかった。

## 考察

事例数が否定事例の自発的想起および行動予



測に及ぼす影響は、親しい人物を判断の対象とした場合に限られた。また、二つの実験データを統合して実施した分散分析では、親近性と事例数の交互作用がサンプルの違いを問わず働くことを確認した。この結果から、教示に基づく課題欲求の認知の有無が、検索容易性効果の調整の種類を規定するという代替仮説は否定された。親近性は、操作方法にかかわらず否定事例の想起に影響し、検索容易性の間接効果を調整する変数と位置づけられる。

### 総合考察

本研究では、検索容易性効果を調整することが知られる親近性および時間的距離の働きの同異を検討した。この二つの変数は心理的距離に分類され（Trope et al., 2007 前出）、その距離が短い時のみ検索容易性効果が生じるという点で一貫している（Raghubir & Menon, 2005; Rothman & Hardin, 1997）。しかし、背後に想定されている調整のメカニズムは異なり、その働きは直接比較されてこなかった。本研究では、検索容易性の直接効果と間接効果という二つのプロセスとの対応関係から、親近性および時間的距離の調整変数としての働きを調べ、その同異を検討した。

実験の結果、対象人物との親近性は、間接効果のプロセスで検索容易性効果を調整した。すなわち、親しい人物の行動予測では、予測の肯定事例を多く想起し、困難を経験するほど、否定事例を自発的に想起した。行動予測は、この否定事例が考慮されるため、肯定事例の意味に反するよう変化した。他方で、親しくない人物の予測では、肯定事例を多く想起しても、否定事例の想起頻度が高くなることはなかった。

これに対して、想起する行動事例の時間的距離は、直接効果のプロセスで検索容易性効果を調整した。すなわち、最近の行動事例の想起が

困難であるほど、行動予測は想起した事例の内容に反して変化した。しかし、半年以上前の事例の想起では、経験した困難さが予測に影響しなかった。

さらに前者の親近性は、その高低を評定値に基づいて事後に分類した時（実験1）と、教示によって実験的に操作した時（実験2）で、同じ調整効果を示した。したがって、親近性と時間的距離の働きが異なる理由が操作方法の違いに帰属できるという代替説明は否定された。

以上の結果は、親近性および時間的距離による検索容易性効果の調整が頑健であることに加えて、その調整のメカニズムが二つの変数で異なることを示唆している。ここではその異なるメカニズムの整理を試みる。

時間的距離による直接効果の調整は、困難さについての事前の期待という観点で説明したRaghubir & Menon (2005) の主張と整合する。遠い過去の出来事の想起は困難であることが事前に期待できる。多くの事例の想起で経験した困難さは期待に一致する。この期待どおりの経験は情報としての価値を失い、メタ認知的知識を参照した頻度推定（Schwarz & Clore, 2007）に利用されなかったと考えられる。困難さの期待による検索容易性効果の抑制は頑健に観察されている。Hansen & Wänke (2008) は、単語の意味判断課題を用いて、容易または困難の意味概念のプライミングを行い、これを経験の期待の操作とした。その後の判断では、検索容易性効果が容易さを期待させた場合に生じ、困難さを期待させた場合には生じなかった。

これに対して、親近性による間接効果の調整はRothman & Hardin (1997) の解釈と整合しない。彼らの主張によると、親しい人物との相互作用では、主観的な経験を参照することが習慣化している。このような人物の判断では、主観的経験の適用可能性が高く、情報の内容を参照しないと説明されてきた。しかし、本研究に

において、親近性は検索容易性の間接効果を調整した。間接効果は、想起することを求められていない否定事例が自発的に想起され、判断に考慮される過程である。Tormala et al.(2007 前出)が「経験と想起内容の相互作用」と表現したように、間接効果は、事例検索にともなう困難さの影響でありながらも、想起した情報を分析的に処理する過程と言える。この間接効果が親近性の高い人物の行動予測で観察されたという結果を、主観的経験のみを参照した判断の習慣化というメカニズムで説明するのは妥当ではないだろう。

親近性による調整は、処理水準の観点から説明できるだろう。近年の対人認知研究では「重要他者」の認知が着目されている。この知見によれば、親密さは他者の認知を動機付け、多くの認知資源を消費するシステムティックな処理の遂行を促す (Idoson & Mischel, 2001)。検索容易性の間接効果は、処理水準の高いシステムティックな過程に分類される (Tormala et al., 2007 前出)。これらの知見を統合すると、本研究において、親しい人物の行動予測に参加者は強く動機づけられたため、困難さを経験するほど求められない事例を想起するシステムティックな処理を遂行し、間接効果が生じたと説明できる。

また、Liberman & Trope (1998) の解釈レベル理論からも、親近性の調整が説明できる。この理論によると、心理的距離と情報の解釈は対応関係にあり、距離が遠くなるほど、情報の解釈は抽象的になる。たとえば他者の認知では、心理的距離が近いほど「どのように」行動するのかという具体的な事例に基づいて解釈されるが、距離が増すと、「なぜ」そのようにふるまうのかという、性格特性や態度のような抽象的な解釈がなされる。本実験結果は、心理的距離が近い親密な人物の行動予測で解釈レベルが低くなり、具体的な行動事例に着目されたため、想

起を求められていない否定事例が分析的に考慮されたと説明できる。

ただし、解釈レベル理論は親近性と時間的距離を区別しておらず、したがって両変数が共通の影響を持つと予想する (Trope et al., 2007 前出)。この予想は、時間的距離が検索容易性の直接効果だけを調整し、親近性と異なる影響を示した本研究結果と一致しない。したがって、この二つの説明の妥当性を比較する際には、処理水準の観点からの検討が有効と考えられる。

### 引用文献

- Aiken, L. S. & West, S. G. (1991) *Multiple Regression: Testing and Interpreting Interactions*. Newbury Park, CA: Sage Publications.
- Caruso, E. M. (2008) Use of experienced retrieval ease in self and social judgments. *Journal of Experimental Social Psychology*, 44, 148-155.
- Cohen, J. (1978) Partialled products are interactions; Partialled powers are curve components. *Psychological Bulletin*, 85, 858-866.
- Greifeneder, R., Bless, H., & Pham, M. T. (2011) When do people rely on affective and cognitive feelings? A review. *Personality and Social Psychology Review*, 15, 107-141.
- Hansen, J. & Wänke, M. (2008) It's the difference that counts: Expectancy/experience discrepancy moderates the use of ease of retrieval in attitude judgments. *Social Cognition*, 26, 447-468.
- Idson, L. C. & Mischel, W. (2001) The personality of familiar and significant people: The lay perceiver as a social-cognitive theorist. *Journal of Personality and Social Psychology*, 80 (4), 585-596.
- Liberman, N. & Trope, Y. (1998) The role of feasibility and desirability considerations in near and distant future decisions: a test of Temporal Construal Theory. *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 5-18.
- 織田涼・谷口友梨・木原香代子・八木保樹 (2011) 反証事例の自発的想起を介した検索容易性効果. 日本心理学会第75回大会発表論文集, p.76.
- 織田涼・八木保樹 (2010) 他者の行動の予測における主観的経験の利用. 心理学研究, 81, 510-516.

- (Orita, R. & Yagi, Y. (2010) The use of subjective experiences in the prediction of others' behaviors. *Japanese Journal of Psychology*, 81, 510-516.)
- Raghubir, P. & Menon, G. (2005) When and why is ease of retrieval informative? *Memory & Cognition*, 33, 821-832.
- Rothman, A. J. & Hardin, C. D. (1997) Differential use of the availability heuristic in social judgment. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 23, 123-138.
- Schwarz, N. (1998) Accessible content and accessibility experience: The interplay of declarative and experiential information in judgment. *Personality and Social Psychology Review*, 2, 87-99.
- Schwarz, N., Bless, H., Strack, F., Klumpp, G., Rittenauer-Schatka, H. & Simons, A. (1991) Ease of retrieval as information: Another look at the availability heuristic. *Journal of Personality and Social Psychology*, 61, 195-202.
- Tormala, Z. L., Falces, C., Briñol, P., & Petty, R. E. (2007) Ease of retrieval effects in social judgment: The role of unrequested cognitions. *Journal of Personality and Social Psychology*, 93, 143-157.
- Trope, Y., Liberman, N., & Wakslak, C. (2007) Construal levels and psychological distance: Effects on representation, prediction, evaluation, and behavior. *Journal of Consumer Psychology*, 17, 83-95.
- Tversky, A. & Kahneman, D. (1973) Availability: A heuristic for judging frequency and probability. *Cognitive Psychology*, 5, 207-232.
- (2013. 1. 16 受稿) (2013. 4. 1 受理)